



油田としてカナダ北部の市場に石油を供給してきた。

だがこれは、広大な北西準州の本格的開発にはつながらなかった。歴史的意義はともかく、商業的意義はまだ持ちえなかった。市場からあまりにも遠すぎたし自然条件も厳しすぎた。オイルマンたちは、もつと南の、アルバータ州ターナー川流域などの油田に集まり、北辺の地までは足を向けようとしなかった。

人間が嫌っただけではない。石油会社も簡単には動けなかった。北西準州とユークン準州の地表権、鉱物採掘権を連邦政府が握っていたからだ（この点は現在も同じである）。

政府の開発許可を得るには、鉱区エーカーにつき相当額の開発投資を毎年支出するという条件を受け入れなければならず、この金額が非常に大きかったのである。一九五八年に大規模開発の許可申請第一号が提出され、開発競争の幕が切つて落とされるかに見えたが、地理的条件があまりに過酷であるため、多くの企業はやがて開発権を放棄してしまつた。

本格開発の開始には、それからさらに十年を待たねばならない。その十年は、現代社会の石油依存度がそれまでとは比較にならないほど深まつたことが認識された年月でもある。一九六八年初頭に、ブリティッシュ・ペトロリアム社とアランティック・リッチフィールド社が発表した探査計画が、本格開発の発端となつた。

同年の夏には、両社がボフオート海に接するノース・スロープのブルドー湾（アラスカ）で、ついに油層につき当たつたことが明らかになつた。

内外の目が、カナダ北方に集まつた。北西準州（本土）、北極海諸島、そしてその沖合海域で、一九六九年の終り頃までに探査許可申請が出された区域は、全部で約四億エーカー（約百六十二万平方キロ）に及んでいる。その中でとくに有望なのがボフオート海およびマッケンジー・デルタ地域であつた。

一九七〇年代に入ると、政府の開発促進政策は一段と活発になる。七六年に連邦政府は北方の探査を奨励するため、開発費の課税特別控除を決め、また「カナダ

では最も暗く、最も寒い地域だ。二月に太陽が戻り、春になると二十四時間照らし続ける。いわゆる白夜である。気温は上がり、雪はとける。七、八月にもなれば、気温は摂氏五度ぐらい、南の方では二十度ぐらいまで上がる。

北極海諸島の最初の住民はイヌイット（エスキモー）であつた。イヌイットの狩猟家たちは、あざらしの皮で作つたカヤック（小舟）をこいで、これらの島々を転々としていた。

やがて、東洋に通じるといふかの「北方航路」を求めて、英国の探検家たちがやつてきた。一八四七年には、英国海軍のジョン・フランクリンが付近で行方不明になつたため、いくつかの捜索隊が派遣され、それまでヨーロッパでもアメリカでもほとんど無視されてきた北極海諸島に、国際的な関心が寄せられた。まもなく、多くの探検隊を送つた英国が、これら諸島の領有権を宣言した。一八八〇年に、英国は北極海諸島を発見したばかりのカナダに移管したが、新政府は西部開拓に忙しく、北極までは手が回らなかつた。

カナダ政府が北極海諸島の正式な所有権を確立するため、ジョセフ・エルゼア・ベルニア大尉を派遣したのは、ようやく十九世紀も終りに近づいてからである。

設立して、北極海諸島での活動に力を入れた。今では、航空機、電子通信、テレビや電話などの導入によって、イヌイットの生活もすっかり変わった。かつては住む人もなかつた北方の島々にも村ができ、北極南部の小さな村に住んでいた人々はマッケンジー・デルタのイヌビック（人口二千九百人）や

（冒頭のカットは北極諸島百年祭（一九八〇年）のシンボル・マーク。人を象つたもので、イヌック・ストと呼ばれる。）



解氷期の北極